

福島などの16人 佐伯へ

復興のヒント 「糶屋」に学ぶ

東日本大震災と東京電力福島第一原発事故からの復興を担う人材育成に取り組み「ふくしま復興塾」の塾生らが18日、佐伯市を訪れ、全国的な塩こうじブームを巻き起こした糶屋本店で研修した。全国の先進事例を学ぶフィールドワークの一環。

「ふくしま復興塾」の塾生らが佐伯市を訪れ、全国的な塩こうじブームを巻き起こした糶屋本店で研修しました。

キーワードは温故知新

古里愛にあふれる福島県 浅利妙峰さんと次男で10代在住者や出身者ら20〜30代 目の良得さん、三男で経営の16人が訪問。同店9代目 コンサルタント会社代表の



浅利妙峰さん（右端）から塩こうじブームを巻き起こした裏話などを聞く塾生ら＝佐伯市船頭町の糶屋本店

善然さんが講師を務めた。妙峰さんらは、高度成長期に入り、みそなどは造る時代から買う時代になり、うじが売れなくなったが、江戸時代の文献から「塩麴漬」の3文字を見つけ、研究を重ねて調味料として現代に復活させたことやブームの影響で業界の売り上げが年間2億円から62億円に急増したことなどを説明。「温故知新」という考え方が糶屋復興のきっかけをつくれた。古いものに眠っている新しいものを輝かせることも必要」と話した。塾生らは復興のために自



写真1は「地 会社を経営している高橋翔 さんの2011年 写真2は「地

分たちでできることのヒントを探そうと真剣にメモを取っていた。東京都で建設 同塾は昨年発足。年間を通して専門家の講義などを受け、各自が解決したい課題の事業計画を立てる。現在は2期生19人が学んでいる。県外研修は年1回で、本年度は同店を皮切りに佐賀県の武雄市と有田町を訪

①塩こうじブームのヒントは何時代の文献にあったでしょう。

②文中にある言葉「温故知新」の意味を調べてみよう。

③みそはどうやって造るか調べてみよう。こうじの働きも調べよう。